

国語



森川 正樹
関西学院初等部

2020年度版「みんなと学ぶ
小学校国語」編集委員

教科書を介して 目の前の子どもたちに…

1. はじめに

目の前の子どもたちにとって価値ある存在になりたい…。

すべての教師が願うことではないでしょうか。

新しい教科書もまた、その思いで、教育界の不易と流行を見つめながら作られています。今からその魅力を少しご紹介いたします。

2. 一年間で育てたい資質・能力を概観する

国語の授業を作るとき、まずは、学年末に子どもたちに獲得してほしい力は何か、と考えるところからスタートするとよいでしょう。そのような観点で、掲載されている教材と対峙します。そのときに重宝するのが、3年生から6年生までの上巻巻頭にある「〇年生でつきたい力」と、下巻巻末にある「〇年生をふり返って」です（図1）。この二つには、当該学年で取り組む学習内容が、新学習指導要領で示された三つの柱「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に基づいて示されています（ただし、「学びに向かう力、人間性等」は上巻のみ）。

上巻巻頭、または下巻巻末にある当該ページを眺めると、その学年で獲得してほしい力がザッと頭に入ります。

全体の傾向をつかんだら、個々の教材に入っていく。時折これらのページと各教材とを往還する。そうすることで、子どもたちの、その時点での学び手としての立ち位置を把握しながら、指導していくことができます。

これらは、新学習指導要領でいうところの「何ができるようになるか」を整理したページです。



図1：3年下p118-119「三年生をふり返って」

3. 思考力教材で「言葉への見方・考え方」を養う

新教科書において、新学習指導要領を色濃く反映させ新設されたのが「思考力教材」です。これは、論理的思考力と、感性的思考力を養うものです。

例えば、図2をご覧ください。これは、「いろいろな見方で分類しよう」という教材です。

まずは、ここに示された8種類の生き物のアイコンを、自分なりに仲間分けし、まとめていく。その上で、分けたまとまりをクラスに提示し、その子がどのような観点で仲間分けしたかを当てていく、というシンプルな活動が考えられます。このように、特徴ごとにまとめるという演習的な活動を通して、「分類」と

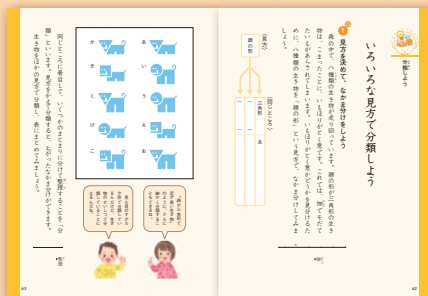


図2：3年上p62-63



いう概念の大枠を獲得します。

もちろんこれで終わってしまっては「使える力」となりません。例えばその後、話し合い活動などの際にクラスで出た意見を、教師が意識的に位置を変えながら黙って板書し、しばらく板書がたまった段階で、「先生はどのように考えてこの場所に書いたのか」という問いかけをすることができます。板書の観点を確認したところで、今度は、次に出される意見をどこに書くかを、みんなで考える。そのような活動につなげていくことができます。高学年では、書き分けていく段階から児童自らが進めていくことも考えられます。

これらの活動の起点として新教科書を活用してください。なお、他学年では、新学習指導要領で言われる「類推」や「原因と結果」など、論理的思考力を育むポイントとなる活動を端的な演習教材として設定しています。論理的思考力を育てる出発点として活用していただければと思います。

「感性的思考力教材」についても同様です。図3をご覧ください。これは、呼応の副詞を含んだ一つの文を作り、それを二つに分けて、ほかの友達が作った文章とシャッフルしてつなげる活動を行い、そこに生まれる言葉や文脈の妙を楽しむ教材です。

言葉は力をもっており、言葉や文の組み合わせでさまざまなイメージを引き起こします。実際の授業では、あまり細かいことは言わずに、言葉を感性でとらえて、言葉から広がるイメージの面白さに浸らせるようにします。

自由な発想や想像力を、体験を通して実感し、楽しむのです。教科書のこの学習をきっかけとして、言葉に対する自分なりの見方・考え方を養っていきます。ほかにも「ひろげる：連想」(3年生)、「くっつける：結合」(4年生)、「おきかえる：転換」(6年生)といった観点の教材が、それぞれの学年に合わせて展開されており、イメージや連関思考を中心とした感性的思考力を養うことができます。

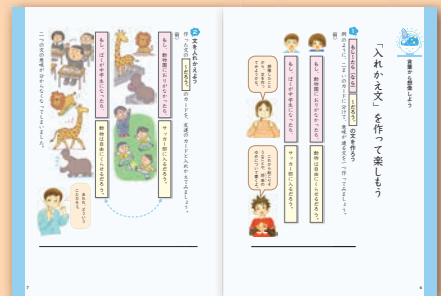


図3：5年下p6-7

4. 書くことレッスン教材で国語の基礎力を養う

最後に取り上げるのは、書くことレッスン教材です。書くことに少しでも味つけをすることで、子どもたちは、「書かされている」という意識から、自ら言葉をつむぐ楽しさを感じるようになります。表現を楽しみながら書くことは、学校生活に彩りをそえる知的な遊びになっていきます。例えば、図4をご覧ください。ここでは、3パターンの日記からテーマを選べるようにし、さらに作品例を掲載することで、児童がイメージをもって取り組みやすいようにしています。それでも書くことが難しい子には、作品例を視写させることもできます。

実作を伴う教材ではこのように、「イメージさせて→全員が安心して取り組める」という配慮を多く取り入れています。楽しみながら書くための基礎的な技能を身に付ける中で、表現の豊かさを実感することができますでしょう。

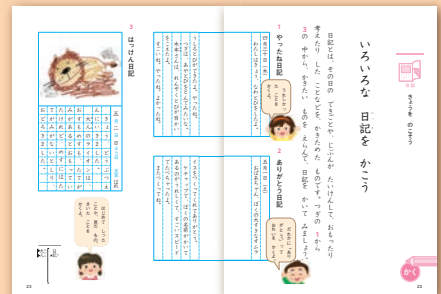


図4：2年上p22-23

5. おわりに

教科書を授業の中でどのように使うかを最終的に決めるのは、当然、教師自身です。教材をアレンジしたり、自作教材を挿し込んだりすることもあるでしょう。しかし、実際の現場では、時間をかけて教材研究できない場合があります。

新教科書は、うまく活用することで、子どもたちに安定した授業をいつでも提供できるように、工夫して作成してあります。また、教師用指導書には、より具体的な指導の工夫がまとめられています。それらも活用しながら、これからの社会を生き抜く確かな言葉の力を身に付けた子どもたちを育てていきましょう。

子どもたちの学びの指針とも糧ともなる大きな存在としての教科書。作り手も使い手も真剣勝負です。

すべては目の前の子どもたちのために。

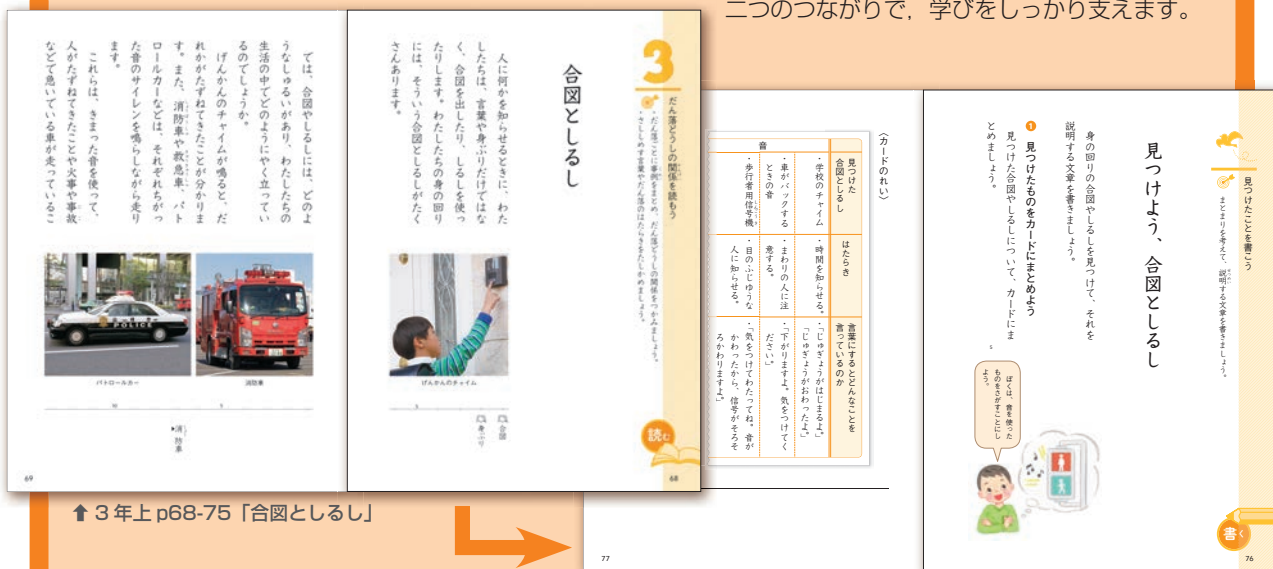


みんなと学ぶ 小学校国語

特色①

読んだことを書くことに生かし、
深い学びを促す

説明文教材の後に、同じ題材の「書くこと」
教材を配置し、関連した学習ができるようにし
ました。「意欲・探究心」と「資質・能力」の
二つのつながりで、学びをしっかり支えます。



↑ 3年上 p68-75 「合図としるし」

↑ 3年上 p76-79 「見つけよう、合図としるし」

説明文教材 「合図としるし」

身の回りにあるさまざまな合図
としるしが自分たちの生活に役
立っていることに気づく。

どんな「種類」があり、どのよ
うに役立っているのかを整理し
て読みながら、段落の役割に気
づいたり、文章全体の構成を理
解したりする。

意欲・探究心のつながり

二つのつながりで
学びを支える。

資質・能力のつながり

「書くこと」教材 「見つけよう、合図としるし」

「もっと調べたい」といった学習
意欲や探究心をもち、文章にま
とめるために、身の回りから見
つけたり調べたりする。

身の回りから合図としるしを集
め、それらを「種類」と「働き」
に分けて整理し、段落や文章構
成を考えながら書く。

説明文を読んで内容や文章構成を理解したうえで、日常生活から見つけたことを調べ、まとめるといった表現活動につなげることで、深い学びを促します。内容と形式の両面に関連させることで、実感を伴いながら論理的に思考し、学びを深めていくことができます。また、螺旋的・反復的な学習を進める中で定着を図るとともに、他教科や総合学習との横断的・合科的な学習への可能性を広げていくこともできます。

言葉と深く関わり、新しい世界を切りひらく

言葉と深く関わり、没頭しながら、目の前の課題を踏み越えた時、子どもたちはこれからの社会を生きるための「確かな言葉の力」を身に付けることができます。言葉の力を信じ、自信と希望をもって新しい課題に挑戦する子どもたち。そのような姿を思い描き、教科書を編集しました。

特色②

複数の文章を比べて読み、 多面的に考える力を身につける

同じ題材について書かれた複数の文章を、目的に応じて比べて読む単元を新設しました。読む観点を焦点化することで、それぞれの文章の構造や表現の違いを、視覚的に捉えることができます。



② 観点をもちくらべよう
二つの文章の読みのかたを、それぞれの観点をとくにくらべよう。

観点	「空飛ぶぶろしき ムササビ」	「ムササビがくらす森」
登場人物		
場面・状況		
目的・意図		
表現の特徴		
構造的な特徴		
その他の点		

130ページ

←学習のてびきより抜粋



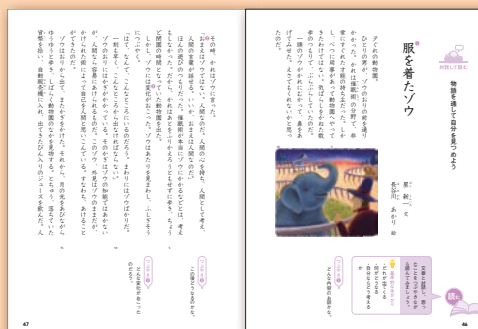
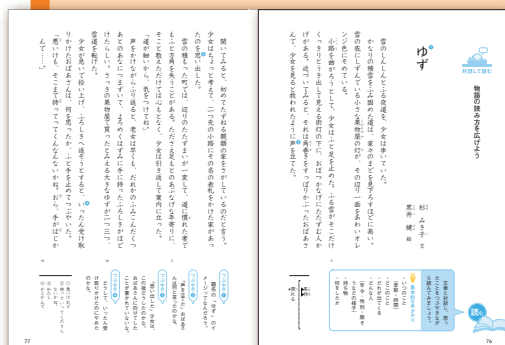
↑ 4年下 p9-17 「二つの文章をくらべて読もう」(右図も同)

これまで学んだ読みの技能を総動員し、目的や観点を明確にして文章を読み比べることで、それぞれの文章の特質を解明していきます。筆者の述べ方を吟味・評価しながら多面的に考えることで、自分の立場が明確になり、考えを形成する力を身に付けることができます。

特色③

文章と対話しながら読み、 問い続ける態度を育てる

対話して読むための「問い」の一例を、脚問形式で提示しました。文章を通して作者が読者に訴えかけるメッセージを受け取りながら、自分のもつ知識や生活経験と結び付けて考える中で、ものの見方や考え方を広げることができます。



↑ 5年下 p76-80 「ゆず」

← 6年下 p46-54 「服を着たゾウ」

星新一著「服を着たゾウ」(新潮文庫『マイ国家』所収)

物語の世界を楽しむためには、あらすじを押さえるだけでなく、登場人物の気持ちや様子を想像しながら読むことが大切です。物語の登場人物に寄り添いながら、「わかる、わかる」「なぜだろう」、など自分と重ねながら共感や疑問を繰り返し抱くことで、読みは豊かで深いものになっていきます。

目の前の事象に対して問い続け、想像力を駆使して理解しようとする態度は、現実の社会における多様な考えを理解したり、新しい価値を見出したりするための、「生きて働く力」につながっていきます。